

資料館だより

第 77 号
2016.3.1

コーナー展

港区遺跡展

—最近の発掘調査から—



豊前小倉新田藩小笠原家屋敷跡遺跡の切土跡

区内では、現在 182 件の遺跡が確認されています。1970 年代後半を境に、遺跡は開発事業等に伴い発見されることが多く、毎年のように記録作成のための発掘調査が行われています。

区内で発見される遺跡は、その歴史的背景から、江戸時代の武家屋敷や町屋、寺院の跡が多く、そこから、建物、地下室、上下水道などの遺構や日常生活に用いる碗や徳利などの遺物が発見されます。それらを調査研究することにより、屋敷内の様子や日常生活の一片が明らかになります。

今回のコーナー展では、近年発掘調査された、豊前小倉新田藩小笠原家屋敷跡遺跡と港区 No. 10、11-2 遺跡の 3 遺跡の調査成果を前期・後期に分けて紹介します。1 月 22 日から 3 月



港区 No. 10 遺跡で見つかった木樋

16 日までは六本木六丁目に所在する豊前小倉新田藩小笠原家屋敷跡遺跡で検出された陶磁器等を展示し、併せて、この遺跡を特徴づけている切土跡や地下室などを写真パネルなどで紹介します。

3 月 18 日から 5 月 18 日までは、赤坂一丁目に所在する港区 No. 10、11-2 遺跡で発見された玉川上水の本幹樋と考えられる水道施設の構造などを写真パネルなどで解説します。

会 期：平成 28 年 1 月 22 日（金）

～ 5 月 18 日（水）

会 場：港区立港郷土資料館

御田八幡神社の百度石

杉本 絵美
(文化財保護調査員)

御田八幡神社は、江戸時代に三田の惣鎮守として人々の信仰を集めた神社です。社伝によると、和銅2年(709)に武蔵国牧岡に創建され、寛弘8年(1011)、御田郷久保三田(現：三田一丁目付近)の地に遷座したと伝えられています。その後、寛永5年(1628)に現在の地(三田三丁目)に移りました。古くから区内に鎮座した由緒ある神社で、今もなお多くの人々が参拝に訪れます。

昭和20年(1945)5月の空襲により社殿は焼失し、現在の社殿は昭和29年に再建された建物ですが、境内には氏子たちによって寄進された石造物が多く残されており、その中には江戸時代に造られたものもあります。元禄9年(1696)銘の狛犬1対、延宝3年(1675)銘の燈籠などは、区内の石造物の中でも古い部類に入ります。

中でも拝殿前にある百度石は特徴的です。百度石とは、いわゆる百度参りのための石で、角柱などの柱状であることが多いのですが、この神社の百度石は箱形で上面が大きく開口した、珍しい形をしています。一辺が約91cm、高さが約57cm(脚を含む)、正面に「百度」、裏面に「奉納」と刻まれており、ほぼ同じ大きさの台座石

の上に安置されています。台座石の銘文から、芝田町九丁目の若者中6名によって、文政10年(1827)8月に奉納されたものであることがわかります。

百度参りとは願掛けのための行為で、社寺の入口から拝殿や本堂までの間を100回往復し、そのたびに神仏に祈願します。古くは『吾妻鏡』に、文治5年(1189)8月10日、奥州追討の祈願のために北条政子が鶴岡八幡宮で女房達に「百度詣」をさせたとありますが、一般に流行したのは江戸時代に入ってからとされています。

元々は100日続けて参拝していたのが、簡略化されて1日で100回参拝するようになったと言われており、その起点となる目印として入口や鳥居のそばに置かれているのが百度石です。100回参拝したことを数える手段として、あらかじめ100個の小石や木札、竹串などを用意して1回参拝するたびに1つつ置いていくという方法があり、今でも神社によっては、百度参りをする人のために木札やこよりを用意している所があります。

前述のとおり、御田八幡神社の百度石は、形や安置されている場所が変わっており、その事について、宮司さんにお話をお聞きしたところ、かつては水槽のように水が張っており、参拝するたびに水の中に木札のようなものを入れて回数を数えていたそうで、「水に流す＝身を清める」というような意味も込められていたのではないか、ということでした。つまり、起点としての目印ではなく、回数のカウントと手水鉢のような役割を担っていたようです。

区内には赤坂氷川神社にも天保4年(1833)銘の箱形の百度石が存在し、江戸時代の百度参りのあり方を考える上で貴重な存在です。



百度石(御田八幡神社)

都市江戸の埋蔵金

— 出土金のとりあつかい方 —

竹村 到

(文化財保護調査員)

平成27年11月に、資料館講座「江戸のお金を考える」を3回にわたって開講しました。講座は多くの参加者に恵まれ、好評のうちに幕を閉じることができました。

その講座で、筆者は「江戸町人埋蔵金狂想曲 - 結城晴朝^{はろとも}の埋蔵金伝説」と題して、江戸町人が結城氏の埋蔵金で一攫千金を狙う様子をお話しました。この話は、旧幕府引継書類とよばれる江戸幕府の公式記録の中に残されていました。

結城氏の埋蔵金は、結城晴朝が退去する時、現在の栃木県下野市本吉田に大量の金銀財宝を埋めたとされるものです。

江戸時代中期から後期にかけて、江戸の町人たちは何度か発掘許可を幕府に求めています。このうち、記録によると少なくとも8回ほど発掘が認められています。江戸時代にこれらの埋蔵金が出土することはありませんでした。このような一攫千金は夢まぼろしとなりましたが、都市江戸では土の中から金銀が出てくることごとたびたびありました。

たとえば、国立公文書館所蔵の『天保雑記』には、天保6年(1835)閏7月の出来事として、次のような記述がみられます。

【史料1】

柴井町桐油屋

勇 吉

右の者方にて当月十八日、床下穴蔵修復致すにつき、根太・柄木等とり払い、柄木石の下を四・五寸(12~15cm)堀り候ところ、小判百両など主知らず、土中より堀り候につき訴え出で候よし、風聞の事 ※根太:床板を支える木
これは、柴井町(現:新橋五・六丁目、東新橋二丁目)の桐油屋勇吉が床下に設置した穴蔵を修復する際、床下から持主不明の小判100両が出てきたということです。

この小判は勇吉より前に住んでいた人のものと考えられます。それが、火災などの災害によって、埋めた場所がわからなくなっていたのでしょう。そして、勇吉が穴蔵修復をした際に、たまたま小判が見つかったものと思われます。勇吉は、小判が自身のものではないので、出土金があったことを役所に訴えています。

同じく『天保雑記』には、別の出土金の話も載せられています。

【史料2】

(前略) 牛天神下屋敷を上がり、目白台水戸殿へ引き移りこれある時、(中略) 桜を買い受け、中間を堀りに遣わせし候ところ、木を堀り土中より金三十両堀り出しかば、兩人の中間自分のものとなしあい分け、それより酒食に遣り出し候ところ、身分不相当の遣権につき耳となし、たちまち柴田七左衛門の同心の手に掛かりめし捕らえられ入牢となり(後略)
これは、この柴井町の一件の約4か月前に起こった出来事です。

高級旗本である寄合^{よりあい}が引っ越しの際に、牛天神(現:小石川周辺)の下屋敷にあった桜の木を別の旗本に売却しました。旗本が、桜の木を移植するため、自身の部下に堀らせたところ、土の中から金30両が出てきたという一件です。

この部下は、前にみた勇吉と違い、役所に届けることなく自分のものにしてしまいました。そして、そのお金を飲食に使ったところ、金額が身分不相応であったため、同心に捕らえられ、入牢となっています。

このように、土の中から出てきた金銀・古銭は、役所に届ける必要がありました。届けた場合は、金額の一部が貰えることもありましたが、着服したり、届けなかった場合は、それが発覚した時に厳罰が下されたのでした。

新 橋

橋と町並の今昔

平田 秀勝 ・ 川上 悠介
(文化財保護調査員) (学芸員)

かつては文明開化の象徴ともいえる鉄道発祥地として、今では昼夜を問わず多くの人々が行交う賑やかな「サラリーマンの街」として広く知られる新橋。その周辺には、町名や駅名に用いられている「新橋」の他に「土橋」、「難波橋」、「蓬莱橋」といった「橋」の付く交差点や高速道路入口が見られますが、今そこに橋や川、水辺は見当たりません。新橋をはじめ、これらの地名や交差点名は、かつてこの場所に橋が架けられていた名残であり、昭和 39 年 (1964) 開催の東京オリンピックに合わせて行われた都市開発の影響で姿を消しました。

橋梁としての新橋は江戸時代までさかのぼることができます。現在の新橋一丁目から虎ノ門一丁目にかけて、港区と中央区、千代田区との区界にあたるところには、かつて江戸城外堀の一面を担う汐留川という堀割が流れていました。新橋とは、元来、新しく架けられた橋であることから付けられた呼称ですが、寛永 9 年 (1632) 刊行とされる『武州豊嶋郡江戸庄図』には、すでに汐留川の東海道筋、出雲町 (現：中央区銀座八丁目) と日比谷町 (現：新橋一丁目) との間に橋が描か

れています。新橋が架けられた年代は詳しくはわかりませんが、東海道の起点を日本橋に定めた慶長 9 年 (1604) 頃に架橋されたものと考えられ (慶長 6～9 年までの東海道の起点は芝 (現在の芝一、二、四丁目付近))、名前に反して江戸草創期から



写真 1 新橋から銀座方面 (明治 28 年頃)

の古い橋であることがうかがえます。宝永 7 年 (1710)、新橋の北側に御門が建設され、芝口御門と名付けられました (芝口御門は享保 9 年 (1724) に焼失し廃止)。この時、新橋は芝口橋と改称されています。しかし、その後も通称として新橋の名も引き続き用いられていました。新橋が正式な橋名となるのは、明治維新後のことです。

江戸時代の新橋ならびにその周辺の様子は『江戸名所図会』(天保 5～7 年 (1834～1836) 刊) などの地誌にも描かれています【図 1】。江戸時代の新橋は木橋でしたが、明治 3 年 (1870) に土橋に改修されました。土橋改修後の新橋を写した明治 28 年頃の写真が残されており、写真からは木造の橋桁の上に土を敷いて路面としていることがわかります【写真 1】。また、橋の中央には馬車鉄道の線路が敷かれ、路上にはその車両も

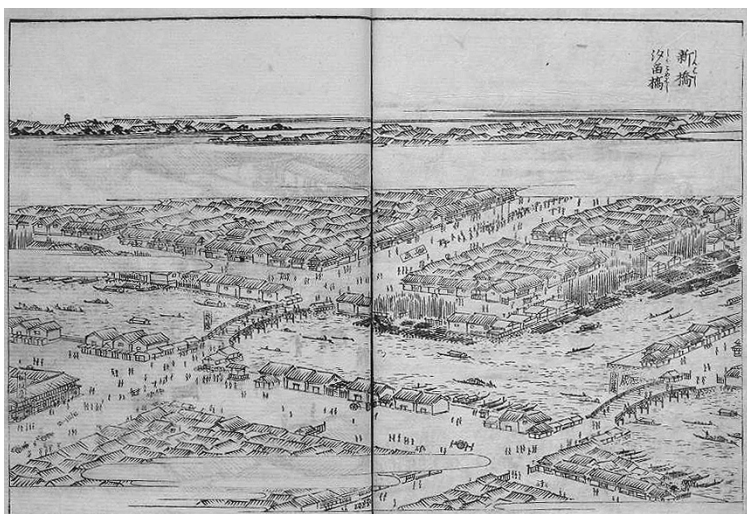


図 1 新橋 汐留橋 (『江戸名所図会』より)
図左側の橋が新橋。芝より京橋 (銀座) 方面を望む



写真2 東京名所 新橋 鉄橋時代の新橋

見られます。明治30年2月より架け替え工事が行われ、2年後の明治32年5月、当時の港区域でも数少ない鉄橋に生まれ変わりました【写真2】。しかし、この鉄橋も大正12年(1923)9月の関東大震災で損傷し、新たに鉄筋コンクリート製の橋に架け替えられました。これは、関東大震災後、最初に架橋された鉄筋コンクリート橋と言われています【写真3】。

新橋が架け替えにより姿を変えていくとともに、その周辺の様子も時代に合わせて変化します。町名や地番が明確に設定されていなかった江戸時代、「山の手の坂、下町の橋」という言葉があるように、坂や橋はその地域を認識するためのランドマークとして機能していました。東海道筋にあたり、江戸城下町の中心地である日本橋・京橋(銀座)界限と芝とを結ぶ新橋周辺は、当時より交通の要所、または繁華街として栄えていました。橋をランドマークに見立てた江戸っ子たちは、橋



写真3 鉄筋コンクリート造の新橋
関東大震災は、鉄筋コンクリートの普及を促がした

を中心に南北それぞれを新橋(または芝口)と認識しており、新橋北側の金六町・出雲町・日吉町・八官町・丸屋町・加賀町・惣十郎町・竹川町辺り(現:中央区銀座七、八丁目辺り)には、幕末から明治期に「新橋芸者」と呼ばれる芸者衆が住む花街が繁盛しています。新橋南側の芝口(現:新橋一丁目)には、天ぷらの橋善、佃煮の玉木屋、呉服の松坂屋、萩の餅など江戸・東京にその名を知られた名店が軒を並べ、烏森神社(現:新橋二丁目)付近には「新橋芸者」と肩を並べる「烏森芸者」の花街がありました。花街の名にも見られるように、江戸から明治初期、新橋の名は橋の北側を指していましたが、明治5年(1872)、新橋一横浜間に鉄道が開業し、汐留町(現:東新橋一、二丁目)にその起点となる新橋停車場が設けられると、橋の南側、現在の港区側を示すようになりました。新橋停車場は、大正3年(1914)、東京駅の完成により貨物専用駅「汐留駅」となり、旅客駅は現在の場所に新しく建造された「新橋駅」へ引き継がれます。新橋駅周辺の町は、関東大震災で焼失し、大きな被害を受けます。その後の復興と区画整理により江戸時代以来の町名である芝口・源助町・露月町・柴井町をはじめとする町々を再編して、正式に新橋一〜七丁目としました。さらに昭和40年(1965)、住居表示の実施により、汐留から愛宕下通りに至る広い地域を新橋・東新橋・西新橋としています。

汐留川に架かる橋の名からはじまり、地域の通称や駅名、町名の由来ともなった新橋は、昭和38年、汐留川の埋立てによって、その姿を消しました。現在は橋が架けられていた場所の傍らに親柱



写真4 現存する親柱(平成28年1月撮影)
建設時に流行していたアール・デコ風のデザインを今に残す

のみが残され、橋のおもかげを今に伝えています。

描かれた鉄道 館蔵鉄道錦絵より

小澤 絵理子
(文化財保護調査員)

港郷土資料館では、区内の場所や風俗が描かれた錦絵（浮世絵版画）を多数所蔵しています。これらの錦絵は、写真という記録媒体がまだ普及していなかった時期の歴史資料としても重要な資料です。流行風俗、人気の観光地や注目された出来事などを描いた、錦のように鮮やかな色使いの木版画は「東錦絵」とも呼ばれ、江戸土産の定番でした。

幕末期に日本にもたらされた写真が開国を経て徐々に普及するにつれ、錦絵は情報媒体としての役目を終えることになります。しかし、江戸時代後期から幕末・維新时期という激動の時代にも、それまで通りに錦絵が新奇な風物を人々に伝えていました。中でも明治5年（1872）の鉄道開通は、文明開化を象徴する大きな事件の一つとして多くの作品が残されています。



図1 昇斎一景「夕留より蒸気車御開業祭礼之図」（明治5年9月）

開通祝典の新橋停車場を描いたものには、華やかで活気に満ちた空気が再現されており、賑わう停車場界限の人々の風俗が和洋さまざまであることもわかります【図1】。

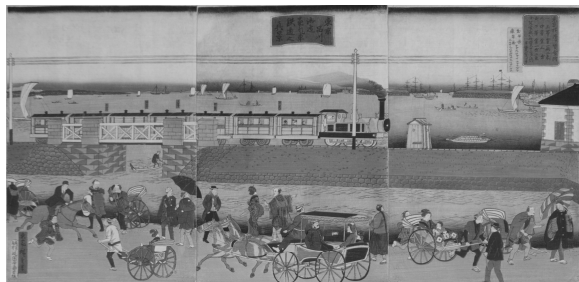


図2 歌川広重（三代）「東京品川海辺蒸気車鉄道之真景」（明治5年9月以降力）

また、港区域には出発駅の新橋停車場があっただけではなく、仮開業の始点となった品川停車場もありました（元の品川停車場の場所は八ツ山橋の北側。現港南二丁目南端）。江戸の名所の一つであった高輪海岸は、江戸時代の錦絵にも多数描かれていますが、出発から海沿いを走る蒸気車は、開化期の錦絵に恰好の画題だったといえるでしょう【図2】。



図3 歌川芳年「東京名勝高輪 蒸気車鉄道之全図」（明治4年9月）

ところが、複数の絵を見比べると、汽車のデザインや色が違っていたり、中には【図3】のように、到底走とは思えない奇妙な形のものや、周囲の様子にしても、当時の日本にはあり得なかった風俗が描かれている作品もあります。これらの改印※を確認すると、鉄道開通前の明治4年（1871）に版行されていたものが少なくありません。つまり、絵師は実物や実際の風景を見ずに描いたということになりますが、蒸気車の走る様子を見たいという時代の要求に応えたものだと考えられます。鉄道開通はそれだけ人々の関心が高い出来事だったのです。

※改印：草双紙や錦絵等の出版の際、風説の流布や政治体制への禁忌その他、不都合な内容でないか「改」と呼ばれた検閲が行われ、問題がないとされたものに押された。形式は時期によりやや異なるが、制作年月を知る主な材料である。



図3の改印
右上から「未九/改」とあり、明治4年9月のものとわかる。

石井家資料

明治期の区内商家の経済活動

小緑 一平
(文化財保護調査員)

石井家は、江戸時代後期の 19 世紀初めから大正 9 年 (1920) までの 6 代 100 年あまりにわたり、芝車町 (現：高輪二丁目) で万清楼^{まんせいろう}という料理店を経営していた家です。万清楼は、幕末の日本に駐在していたイギリスの外交官アーネスト・サトウの回想録である『一外交官の見た明治維新』にも登場します。それによると、慶応 3 年 (1867) ごろに門良院という泉岳寺の塔頭を住まいとしていたアーネスト・サトウらは、三食すべてをこの万清楼 (『一外交官の見た明治維新』では単に万清と表記) から運ばせた和食で賄っていたようです。

その石井家の旧蔵資料が平成 26 年にご子孫から当館に寄贈され、現在調査・研究を進めています。資料は、江戸時代から明治時代中期にかけての料理店の営業・経営に関するもの、明治時代の土地・不動産に関するもの、明治時代の金融・株式投資・企業経営に関するものの 3 つに大別されます。

今回は、その中の石井家の株式投資に関する資料についてみてみたいと思います。石井家第 3 代の石井清八 (天保 4 年〈1833〉～明治 36 年〈1903〉)、第 4 代の石井鎌太郎 (安政 3 年〈1856〉～明治 35 年) の時代には、本業の料理店経営のほかに毛布製造会社の経営への参画、不動産経営、株式投資といった経済活動も盛んに行っていました。

彼らが経済活動を行っていたのは、ちょうど企業勃興期 (明治 20 年頃) といわれる会社設立ブーム^{でんとう}の前後の時期で、鉄道・紡績・海運・電燈等の分野で多くの株式会社が誕生していたころでした。当時の株式取引において、その売買の中心は鉄道株であり、ほぼ毎年全国売買高の過半を占めていました。そのため石井家資料にも、のちに鉄道国有法 (明治 39 年) に基づき国有化

される当時私鉄の北海道炭礦・甲武・日本・山陽・九州・北越・総武・七尾・参宮の各鉄道会社や、東武鉄道・高野鉄道 (現在の南海電気鉄道の前身の一つ)・近江鉄道といった現在まで系譜のつながる私鉄各社、のちの東京市電 (都電) の前身の一つである東京電車鉄道会社に関する資料が含まれ、石井家が全国各地の鉄道会社に投資を行っていたことがわかります。

また、石井家が投資していた現港区域の企業の一つに、品川電燈があります。品川電燈は、三井物産出身でのちに箕面有馬電気軌道 (現：阪急電鉄) や大阪電気軌道 (現：近畿日本鉄道) の社長となる実業家の岩下清周が、益田孝 (三井物産創設者) の後ろ盾の下、明治 22 年に設立しました。設立時の資本金は 10 万円で、本社は高輪南町 (現：高輪四丁目) に置かれました。

翌年に開業しますが、本社にあった火力発電の煤煙が毛利邸 (現：品川プリンスホテル付近) を襲うため、毛利家の支弁を受けて明治 25 年に田町四丁目 (現：芝五丁目など) に移転しました。

品川電燈は、当時の東京市内の電燈シェアの約 1 割を占めており、明治 29 年に競合する帝国電燈を買収するなど積極的経営を進めましたが、明治 35 年に東京電燈 (日本初の電気事業者、明治 20 年開業) に買収されました。

資料中の「品川電燈会社第二回定式株主総会報告書」の 11 頁の株主人名表には、岩下清周・益田孝・大久保利和 (侯爵、大久保利通の長男)・後藤象二郎 (伯爵、当時の逓信大臣) らとならんで、石井家第 4 代の鎌太郎の名前がみえ、大株主として活躍していたことがうかがえます。

【参考文献】アーネスト・サトウ著・坂田精一訳『一外交官の見た明治維新』上・下 (1960 年 岩波書店)、東京電力発行・編集『関東の電気事業と東京電力』(2002 年)

事業予定 (平成28年3月～)

コーナー展

- ・「港区遺跡展—最近の発掘調査から—」

開催中～5月18日(水)

- ・「平成27年度新収蔵資料展」

5月20日(金)～9月(予定)

講座など

- ・資料館講座(金曜日の夜間に開催します)

「日本鉄道史と新橋駅」(全3回)

(2月26日)・3月4日・11日

- ・親子学習会(3月第2・第4土曜日に開催します)

「日本庭園にふれてミニミニ石庭

(枯山水)を作ってみよう!」3月12日・26日

※事業の詳細は『広報みなと』や郷土資料館ホームページをご覧になるか、当館へお問い合わせ下さい。

刊行物案内 (平成28年3月末刊行予定)

『研究紀要 18』

『研究紀要』は港区の歴史・文化に係る研究成果を報告する目的で発行しております。今年度は、館蔵資料の「金杉川口河岸の町屋図面」、鉄道発祥の地として知られる港区で新たに収蔵した交通関係資料の紹介、虎ノ門五丁目に鎮座する西久保八幡神社に江戸時代におかれていた別当寺の住持決定に関する論考を収載します。(頒布価格未定)

※このほか、『増補港区近代沿革図集』『写された港区』など、各種刊行物があります。販売は展示室横の事務室、または郵送にておこなっています。郷土資料館ホームページに一覧の掲載があります。また、本誌のバックナンバーの一部(57号以降)は、ホームページでご覧いただくことができます。

事業報告 (平成27年10月～平成28年2月)

- ①コーナー展「乃木家葬儀関係文書～館蔵資料より～」

10月28日～12月16日

- ②土曜体験教室「管玉作り」・「勾玉作り」・「縄文耳飾り作り」

10月31日・12月19日・平成28年2月13日

- ③第一回資料館講座「江戸時代のお金を考える」

11月6日・13日・20日

- ④コーナー展「平成27年度指定文化財展」

12月18日～平成28年1月20日

港郷土資料館では、港区の歴史や文化に関する資料を探しています。これらの資料をお持ちの方で、ご寄贈いただける場合や資料調査にご協力いただける場合は、当館までお知らせください。

港区立港郷土資料館の利用案内

交通

JR「田町」駅下車徒歩5分、都営地下鉄「三田」駅下車(A3出口)徒歩2分
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩2分、港区コミュニティバス(ちいばす)
「田町駅前」停留所下車徒歩2分、「田町駅西口」停留所下車徒歩3分

開館時間

9:00～17:00

(さわれる展示室の開室日時は、
火・金・土の12:30～16:30)

休館日

日曜日・祝日・第3木曜日
年末年始・特別整理期間

(臨時休館などはHP等で随時お知らせします)

入館料 無料



『資料館だより』第77号

平成28年(2016)3月1日発行
編集・発行 港区立港郷土資料館
〒108-0014

東京都港区芝5-28-4

Tel. 03-3452-4966

Fax. 03-5476-6369

<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/>

刊行物発行番号 27108-7541